

憲法と映画(117)『大統領のケーキ』

イラク・アメリカ・カタール合作

<かな>



家の近所に小学校があり、朝はスクールガードの方々が辻々に立って児童の見守り活動をしています。学校のフェンスには、「イカのおすし」なる横断幕が掛けてあって、見知らぬ人には付いて「イカない」、「乗らない」、「大きな声を出す」、「すぐ逃げる」、「周りに知らせる」との、子どもたちに危険予知と対応の仕方を学ぶスローガンみたいです。

同じ小学校でも90年代イラクの9歳のラミアの通う小学校は、自力で小舟を漕いで登校し、先生にカバンの中を点検されて、昼食用の大事なリンゴを没収された上に、クジでフセイン大統領の誕生を祝うケーキ作りの担当に指名されてしまいます。でも学校が材料費を負担してくれるでもなく、それこそ「自

己責任」で材料を調達しケーキを用意しなければ退学という重い罰が待っています。祖母と二人暮らしでその日の食事にも事欠く貧乏生活の中で、相談した祖母の取った行動は何とラミアを養子に出してしまうというもの。学校も地域もそして家族も誰も自分を守ってくれないと知った彼女は、「自分の身は自分で守るしかない」と肌で感じます。その上、ケーキづくりというミッションを無事にやり遂げることにこだわります。

ケーキ作りには、たまご・小麦粉・砂糖・ふくらし粉が必要と分かると働いた代償でたまごや砂糖を手に入れようと奮闘します。そんな彼女を支えるのはクラスメイトのサイドという少年です。サイドだって父親が障がい者で働けないため、遊園地など人ごみの多そうな場所でスリをして日銭を稼いでいます。万策尽きたラミアは小麦粉の袋を破り泥棒しますが、それでも任務を全うしようとします。彼女は身の危険を察知すれば即走ってその場から逃げます。彼女は決して泣いたりわめいたりしないばかりか大人に助けを求めたりもしません。それでいて、礼儀正しく人懐っこくて変にひねくれてもいません。むしろ観ていて愛おしくなります。

そんなラミアのような庶民をフセインは盛大な誕生会を祝うために貧乏生活のどん底に突き落とし、アメリカは空爆で罪もないラミアのようなイラク国民の尊い命を奪おうとします。貧困と戦争の理不尽さを見事に告発した心に沁みる作品です。